

「先夏後楽論では動かず」

小中学校における、ゆとり教育の失敗が明らかとなり、各学校は総合学習よりも科目教育を充実させる方向に向かっている。科目教育重視で、学力はある程度上昇させることは可能である。しかし「学力を上げようと努力する動機」を生徒や学生に与えることは可能だろうか。

人はなぜ勉強するのか。それは勉強することが自分の成長を促し、自己実現による精神的充足を得られ、物質的な欲望も満足されて、全体として幸福な人生をもたらすと信じるからである。

しかし、これは青少年が達成できることではない。そこで、この因果関係を分解し、中学生には良い高校に、高校生には良い大学にそれぞれ入学できるように、という目標を与えることになる。だが、これでは因果関係の鎖が長く伸びすぎ、生徒や学生はそれを信じるのができない。大事なことは勉強と幸福な人生の因果関係を分解することではなく、直接目に見える

形で生徒や学生に与えることだ。「勉強は楽しい」「勉強はお金になる」「勉強は安らぎを与えてくれる」という実感を彼らが持てれば、それが勉強の動機になる。「勉強は苦しいが、後で楽

人間の根源的欲望こそ学びの動機

まで家庭、地域社会、自然や友人との触れ合いなどの社会的教育メカニズムによって自然に培われてきた。ところが、現代ではそのメカニズムが崩壊し、人間の根源的欲望は高い次元に昇華さ

門などという科目を設置し、基本的な社会のメカニズムを教える必要がある。当然、それらの科目は客観的事柄のみならず、多くの主観的なものを見方を含む。しかし、人間の様々な主観をき

り、良くも悪くも、生徒や学生の模範となつて特定の科目では主観的に授業や講義を行つても良いだろう。ただし、弊害をなくすために授業を公開することや、生徒や学生からの恒常的なフィードバック

になる」というのでは、身の回りに楽しいことがたくさんある現代の生徒や学生には、もはやなんの動機にもならない。彼らには、お金、遊び、異性との交際、など、多くの欲望があるが、これまで教育現場では、そうした欲望の実現のために何を目標とし、どうすればその目標達成ができるのか、などを教えることはなかった。

正論



同志社大学教授 三木 光範

社会的メカニズム復活を人間の根源的な欲望から出発し、それらを人間社会の中で有益な形に変化させ、高い次元で満足させ、自分も他人も成長・発展することこそ、人間社会の価値ある営みである。そしてその方法は、これ

れる前に低次元で満足させられ、社会にとって有益な花を咲かせることなく終わる。いまこそ各教育機関は、生徒や学生が持つ本当の希望や欲望を表面化させ、その形を変えて社会の中でうまく実現し、自分も他人も大きな満足

が得られる方法を教えなければならぬ。そのためには、「社会の仕組み」「生き方入

が不可欠である。起業が勉学の面白さ加速 このような考えの下、私は今年、「情報キャリアデザイン」という科目を大学で開講した。ここでは、学生たちが自分の希望や夢をうまく実現させるには何をどう勉強すれば良いのか、どのような職業に就いて何を経験してゆくの

「勉強は楽しい」をどう伝えるか

か、などを教え、議論している。学外から講師を招いたり、先輩たちの意見を聞いた

り、新聞や雑誌の記事を読んだりして議論する。この過程で学生たちは、自分の人生は自分で作るものだ、人生のキーワードは「成長」である、常に勉強を怠らなず次の新しいチャレンジに備える、といった考え方に馴染んできた。

開講当初から次第に学生たちの、よりよく生きる、ことへのモチベーションが高くなり、しっかりと勉強しようと考えている学生が多くなってきた。先日、大学院を休学し友人が起業したベンチャービジネスに取組役として参画しているM君に会った。彼は成績も学年トップだったが、仕事を始めてから、ますます勉強が楽しくなったという。

「勉強は楽しい」をどう伝えるか

そうなのだ、モチベーションが高ければ、そして社会を知って自分のやりたいことが分かれば、勉強は本当に楽しいものなのだ。教育機関はいまこそ、勉強の本当の楽しさを生徒や学生に伝える努力をしなければならぬ。

(みき みつゆい)